私のキャリアデザイン

信頼の力を未来へ
jicpa
日本公認会計士協会

一度外に出て見えた監査の魅力

監査法人勤務 公認会計士 早坂さんに聞く

「一度やめて外に出たからこそ、監査の仕事が自分に合っていると気づけたんです」と語るのは、現在大手監査法人に勤務する公認会計士の早坂さん。監査法人から事業会社、海外留学、税務コンサルティングと多様な経験を経て、再び監査法人に戻り、現在はマネージャー職として後進の育成にも携わっています。
今回は、キャリアの転機や監査業務の現在、そしてこれからを伺いました。

2009年　監査法人入所
2012年　一般事業会社に転職
2014年　イギリス留学
2016年　監査法人再入所
2023年　マネージャー昇格

公認会計士を目指したきっかけは何ですか。

大学に入るまで、公認会計士という資格があることすら知りませんでした。大学入学直後に大学の資格取得講座の説明会で資格の存在を知り、難関ではあるけれど、やりがいがあると聞いて挑戦してみようと思いました。当初から監査法人を志望し、他業種は見ませんでした。

キャリアの迷いと事業会社への転職について教えてください。

監査法人では順調に経験を積んでいましたが、主査を経験した3年目に初めて「外の世界を見てみたい」との思いが芽生えました。ヒアリングの場でも、会社の実態がうまく掴めないまま監査をしている感覚があり、内部から経理を見てみたいと考えました。そうして約4年で監査法人を退職し、外資系事業会社の経理職に転職しました。
思ったより忙しくなく、自分にしかできない仕事にやりがいを感じつつも、最新の会計基準を追い続けられない環境に、少し焦りも感じていました。同期が監査法人でキャリアを積み上げていく中で、改めて自身の将来を見つめ直すようになりました。

留学と税務コンサルティングでの学びについて教えてください。

時間もあったし、英語力をつけたいという思いもあって、ロンドンの大学院に進学しました。留学先ではファイナンスを専攻し、多国籍な仲間たちと切磋琢磨しました。授業は大変でしたけど、本当に楽しかったです。
帰国後は、監査ではなく税理士法人の移転価格コンサルティングへ身を投じました。基準が曖昧な中でクライアントに助言するのが、難しかったです。やっぱり、明確な基準に基づいて仕事を進める監査の方が自分には向いていると再認識しました。

再び監査法人へ。復帰後の変化はありましたか。

5年のブランクを経て元の監査法人に復帰しました。ツールも働き方もガラリと変わっていて、正直ギャップは大きかったです。それでも、希望していた大型クライアントのチームに配属され、再び監査の世界に身を置けることが嬉しかったです。
辞めなかったら今ごろもっと昇進していたかもしれないけど、当時の自分には一度やめることが必要だったと思います。外に出たからこそ、今は人と比べず、自分のキャリアを自分で築くという意識が持てるようになりました。

出産・育児との両立はいかがでしたか。

復職後に結婚・出産を経て、現在は4児の母になりました。復帰後も同じチームで働き続け、マネージャーにも昇進しました。育児と両立しながらの勤務は、周囲のサポート体制が大きな支えになっています。
急に子どもが熱を出しても、誰かが代わってくれる。お互い様という意識が根づいていて、後ろめたさを感じずに休める環境があります。チーム内では同様の立場にあるメンバー同士、自然に助け合う文化が育っています。

働き方の変化と今後の展望について教えてください。

リモートワークやデジタル監査の進展も、大きな変化の一つです。移動時間が減ったことで、子どもとの時間も確保できるようになりました。資料のデジタル化も本当に業務効率化に役立っています。また、キャリア支援制度も以前より整備され、同じチームの上司がカウンセラーとして相談に乗ってくれる体制も有難いです。
今後については、将来的にパートナーになりたいです。そして不正調査などのフォレンジック分野にも興味があります。監査を軸にしつつ、新たな領域にも挑戦したいです。

これから公認会計士を目指す人へメッセージを頂けますでしょうか。

公認会計士という資格には常に学びがあり、優秀な先輩方に刺激を受ける環境があります。向学心を持ち続けたい人には、とても良い職業だと思います。特に女性にとっても、何度でも戻ってこられる職場環境があるというのは、本当に心強いです。
一度監査法人を離れても、再び戻るという選択肢があります。多くの若手会計士にとっても大きな励ましになると思います。

2025 年 12 月　日本公認会計士協会広報委員会　発行

私のキャリアデザイン

信頼の力を未来へ
jicpa
日本公認会計士協会

監査の経験は、次のステージへ進む土台になる。

監査法人勤務 公認会計士 堀川さんに聞く

「監査の全体像が見えるまで経験を積むことが、次の挑戦の確かな土台になります。一刀目がナイフのままでは、二刀流になるのは難しいです。」と語るのは、監査法人の地方事務所で 10年経験を積んだ後、Audit Analytics 領域へ挑戦し、ACC（会計監査確認センター合同会社：Audit Confirmation Center）立ち上げにも携わった公認会計士の堀川さん。今回は、監査業務のやりがいからイノベーション事業への挑戦まで、若手のみなさんへのヒントとなるお話を伺いました。

2006年　監査法人入所
2010年頃　監査主任
2016年　Audit Analyticsへ異動
2017年　ACC設立・運営
2019年　監査法人におけるデジタル、AIの企画・開発

公認会計士を目指したきっかけは何ですか。

大学では電子工学を専攻していましたが、新しい分野にも挑戦したいと思い、専門学校のパンフレットをきっかけに公認会計士に興味を持ちました。若手のうちから経営者の話を聞き、ビジネスの深い部分に触れられる点にも魅力を感じ、将来は独立して経営に携わりたいという思いも芽生えました。そこから娯楽を断ち、1年半集中して勉強し、合格しました。

新人時代についてお聞かせください。

入社して最初の1~2年は、先輩の背中を見て多くのことを学んでいきました。自分の力を発揮できる場所に来たという高揚感があり、頑張った分だけ評価される環境だったため前のめりに学び、早い段階で大規模クライアントの案件にも関わらせてもらいました。自分ができることを実感できた一方で、できないことも身に染みて感じました。また深夜に残高確認状を取りに行ったり、実務上生じる様々な事務的な業務では勉強したことが直接活かせていないのではないかと感じる瞬間もありましたが、今振り返れば品質管理として当然必要な手続であり、監査を理解するうえでも欠かせない経験だったと感じます。楽しさと戸惑いが交錯していましたが、学びが多く楽しい時期でした。

補助者から主任になりどのような変化がありましたか？

主任になって大きく変わったのは、監査の全体像を見ることができるようになったことです。クライアントのマネジメント層と直接向き合い、会社全体を理解する視点が一気に求められるようになりました。若手の頃は主任に甘えてしまう部分もありましたが、責任ある立場になると、“言うべきことを言い、行動で示す”ことで初めて信頼が得られるのだと実感しました。また、収益認識の見直しが進んだ時期でもあり、ゼロベースで考え抜く機会が増え、専門家として判断する面白さにも手応えを感じていました。
一方で、主任になっても事務的な業務に向き合う日々は続きますが、その積み重ねが自分を確実に成長させてくれましたし、主任になって見えた景色は、今でも自分のキャリアを支える大きな糧になっています。

監査からイノベーション領域へキャリアチェンジした理由を教えてください。

主任として経験を積む中で、尊敬する先輩方が退職し、自分にも何か挑戦できることがないかを考えるタイミングがありました。新しい領域でチャレンジしたいと考えた頃にAudit Analytics領域の取り組みが全国で広がり始めていました。データを活用して監査のやり方そのものを変えていく――そんな大きなインパクトを生み出せる仕事に強く惹かれ、思い切って異動希望を出しました。 Balance Gateway という確認状電子化プロジェクトが立ち上がったタイミングでもあり、まったく新しい領域に飛び込む覚悟で、SQLやプログラミングの基礎を一から学び、IT資格も取得しました。同じ組織内での異動でしたが、まさに転職するつもりでキャリアをシフトした形です。新しい挑戦を続けていくことがジャンプアップになると考えました。

今の業務内容と、監査経験がどう活きているか教えてください。

デジタルを活用して監査のあり方を変える業務に携わってきました。ACC立ち上げの際には長年紙で行われてきた確認状の手続を電子化するにあたり、真実性の担保や権限確認など多くの課題があり、弁護士と議論を重ねながらルール設計を進めていきました。その後、この仕組みは業界横断の共同運営へと発展し、現在は企画部門長としてその運営に関わりながらデジタルツールの開発等にも携わっています。
異動したのはデータ分析で監査を変えるという考え方を全上場企業に適用しようという時期でした。業界全体に普及していない中で、クライアントが感じている課題を聞き取り、それに対してどのようなデータ分析が行えるかを提案するというワークショップを全国で実施しました。クライアントのビジネスを理解した上で、どの場面でどのようなデータ分析が有効なのか――これは監査の実務を経験していなければ分からない感覚です。監査特有の要件や制約をエンジニアに分かる言葉に翻訳し、データ分析で本当に実現可能かを判断する力は、現場を知るからこそ発揮できる役割だと感じています。
また、ACCの運営にも関わり、現在は20万件を超える確認状がセンターに集まり、すべてPDF化したものをWeb上で確認できる仕組みが整いました。深夜遅くまで封筒詰めをする姿は消え、現場の負担は大きく軽減されています。自分が経験した“苦労”を出発点に、業界全体の改善につながる仕組みをつくれたことは、大きなやりがいになっています。

これから公認会計士を目指す人へメッセージを頂けますでしょうか。

私は監査を10年ほど経験した後、ITを一から学び直し、デジタル領域に挑戦しました。その経験から強く伝えたいのは、まず“監査を武器にできるレベル”までやりきることの大切さです。自らが責任者としてクライアントに向き合い、監査の全体像を理解してこそ次の扉が開きます。その土台があるから、アドバイザリーやデジタルなど新たな挑戦にも広がりが生まれ、二刀流としての強みにつながります。監査の経験を積み重ねて、自分のカラーを出せるような分野に挑戦して専門性を持てると、より一層輝けると思います。

2025 年 12 月　日本公認会計士協会広報委員会　発行